

幼 兒 教 育

第 二 十 三 卷 第 二 號

新 鮮

新鮮は子どもの生命である。山から掘りたての花崗岩の、その割れ目に見える光澤、枝からちぎりとつたまゝのオレンヂの、その皮の裂け目にほとほとほじる香氣。私はひとり／＼の子どもに、この新鮮を感じる。

味づけても、色づけても、形づけても、この新鮮は人の手につくれない。つくろうとすれば光澤がくもる。いちくりまわして居ると香氣がぬける。新鮮は自然ばかりが與へるものである。

塗り色の綾をよるこび、配列の整をたのしみ、つくらんことを願ひ、こしらへんことをつとめて、自然の新鮮を忘れ棄てんとするは、人の過ちにして、愚かにして、また罪である。悲しいかな、此の過ちと、愚かと、罪とが、教育の名に於て常に行はるゝ。パレットを手に、森の前に、自然の色は描き得ても、自然の新鮮のあらはし難きに悩む畫家がある。絃を脇に、海に立ちて、自然の音は模し得ても、自然の新鮮のあらはし難きに悶ゆる樂聖がある。しかも、あの彈む足、あの溢るゝ笑ひ、輝く目、響く言葉、その閃々たる自然の裡に交りて、子どもの新鮮に感じようともしない、鈍い、よどんだ心がある。恥かしいことである。(倉橋生)